

「夜の寢覚」の改作態度

——原作巻一部分に関する対照表——

大 槻 修 編

周知の通り、現存本「夜の寢覚」は四部構造でとらえるのが一般であり、第二部を中間欠巻部分、第四部を末尾欠巻部分と称している。伝本諸本としては、(一)五巻本系統に島原市公民館蔵松平文庫本をはじめとして計六本、また(二)三巻本系統に前田育徳会尊経閣文庫蔵本がある。ただ以上七本とも、すでに中間および末尾の欠巻、錯間などが生じてからのものであり、いわゆる完本は存在しない。

中間欠巻部分は、物語第六年正月から第十四年暮れまでの九年間、末尾欠巻は、最低十年から最大十五、六年間の内容が物語られていたと想定される。これらの部分は、「無名草子」拾

遺百番歌合」「風葉和歌集」「寢覚物語絵巻」などの原作系資料と、後述する改作本「夜の寢覚」とを対比調査することによって、原作の姿をある程度まで推定復元できる。

その意味で、改作本存在の意義は大なるものがあり、欠巻部分の内容の想定に貴重な資料を提供するのみならず、原作の文意難解個所の理解に参考となる点も多い。

改作本は鎌倉末か室町初期に成ると考えられ、三条家旧蔵本と中村秋香氏旧蔵、現金子武雄氏蔵本の二本がある。前者は、山岸徳平・鈴木一雄氏編「改作本夜の寢覚物語」(汲古書院、昭49・2)に全文影印刊行され、後者は早くは古典文庫、また金子武雄氏「物語文学の研究」(笠間書院、昭49・4)に翻刻されている。

さて原作系と改作本との関係を一覧すると次のようになろう。(五巻本系統として松平文庫本、三巻本系統の尊経閣文庫本、

また改作本は中村本を対象とする)

第一部	(五卷本) (三卷本)	(中村本)
卷一 上巻	卷一前半部	
卷二	卷一後半部・卷二前半部	
第二部	中間欠巻部分	卷二後半部・卷三・四
第三部	第三 第四 中・下巻	卷五(巻末欠巻部の一部を含む)
第四部	巻末欠巻部分	ナシ

ここに改作本の改作態度を三部に分けて考えてみると、第一部(改作本の巻一―巻二前半部)は、初め作者も自分なりの言葉で文を構成しようとして覚しき個所も見受けられるが、次第に省略が多く、原作に頼る傾向が増加、やがて、ひたすら省略の姿勢がみえ、原作の安易な簡略化となる。

第二部(同じく巻二後半部―巻三、四)で、第一部の改変から省略への傾向が一層のこと推進され、後半は、より省略、縮少の度が著しい。

第三部(巻五)は、量的には原作の五分の一に縮少されてい

るが、何よりも物語の主題にかかわる根本的な改変がなされている。―というのが一般的な見方である。いま改めて原作の第一部のうち巻一について、それに該当する部分の改作本と比較検討して、改作態度の一面を考察し、順次、原作の巻二、三、四、五に及ぼしてゆきたいと思う。

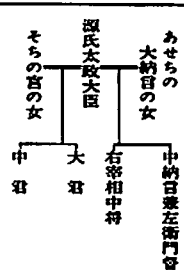
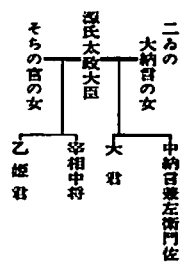
対照表について注記しておきたい。項目に関しては、永井和子氏の分類を参照して、「省略」「簡略」「改変」に区分けしたが、今後、巻を追うに従って、区分け自体の妥当性を煮つめてゆきたいと思う。(その細目)については、対照表が物語の筋書、発展の順になっている関係上、その目次の略記を主として、項目欄の説明的な要素を加味した。ついで、日本古典文学大系「夜の寝覚」、学燈社刊「増訂寝覚物語全訳」、新典社刊「影印校注古典叢書、夜の寝覚」それぞれに該当する頁と行、つぎに原作系の本文(新典社刊の翻刻本文を使用)を引用した。

下半部は改作本系統に属する。まず、笠間書院刊「物語文学の研究」所収の「夜寝覚物語」の該当する頁、行を、その次に該当する本文を同書から引用した。最後の備考欄には必要とする注記を最少限にとどめた。今後この分類方法の是否、妥当性を分析、検討を加えるとともに、原作全五巻に対する改作本全

五巻の比較対照一覧表を作成してゆきたいと思う。かかる意味で本稿は、まず巻一部分に関する中間報告ということになろう。なお本稿、特に対照表作製に関して、永井和子氏「寝覚物語

の研究」に負うところが多い。注記して学恩に厚く御礼申し上げらる。

項目	(その細目)	大系本 (頁・行)	全釈本 (頁・行)	新典本 (頁・行)	原 作	笠間本 (頁・行)	改 作	備 考
1 改 変	冒頭文・起筆 の違い	45・1	123・1	13・1	<p>人の世のさま／＼なる を見き、つもるに、なをね さめの御なからひはかり、 あさからぬ契なから…… 平定最盛期に至る諸作 品(竹取・落窪・うつは・源 氏)の原則的な定型冒頭 様式を打破し、最初に物 語の主題を提示するとい う新機軸をあみだした。</p>	5・1	<p>しとうの露のそこの花 のいろいろおとろへ、すいち くのけぶりのうちにとり のこゑもまれになりゆけ ば…… 連歌をたしなむ者ども が集まって、恋のいい伝 えから夢に語り及び、そ の中の一人が物語り始め る、といった趣向、いわ ば鏡物に似たスタイル。</p>	<p>改作本の起筆は 紫藤露底残花色 翠竹烟中暮鳥声 (和漢朗詠集 春・藤・源相規) を踏まえる。</p>

4	3	2	項目
省略	改変	改変	(その細目)
帝かぜの一件	太政大臣次女の呼び方・年齢	系図・官位	大系本 全系本 新典本
46・6	46・1	45・8	
126・1	123・12	123・7	
17・2	15・9	13・10	
朱雀院のみかと、御かせおこらせ給へりければ、	中の君の十三はかりにてまたいといはけなかるへきほとにて		原作
	6・14	6・5	笠間本
ナシ	おとひめ君は十二にて、いまたいとけなき程なる		改作
	この年齢の改変が、物語の展開の上で、果たして効果あるものか。	大納言は正三位相当、その点二位は左右大臣格となり、また、改作本では左衛門「佐」と一ランク降ろされている。 (松尾忠氏)	備考

8	7	6	5	
改変	省略	改変	改変	
引歌構成	関白、宮中に 参内の件、姉 大君の述懐の 件	3項の翌年	語句の呼称	
49・1	48・ 1～7	47・ 15	47・ 6	
130・ 11	129・ 3	129・ 1	127・ 6	
25・ 11	23・ 3	21・ 11	19・ 12	
あかつきの風にあはせて ひき給へるねの、	殿は、こよひ内にふみつ くり、御あそひあるに： と、き、おとろき、うら やみ給ふ。	君は十四に成たまふ またのとしの八月十五夜 に成ぬ、そのとし、この	来 年	にはかにと、まりて、い とはへなく、ところく に
8・ 11		7・ 17	7・ 9	
ふくかぜも雲のうへまで ゆくべくは、つけこせが ほにひきすまし給へるび わのね、	ナシ	かくてたのめし秋のもの かになりぬ。ことしは十 三にぞなり給ふ。	みやうねん	
改作本の方に引 歌あるか。				

11	10	9	項目
簡略	改変	改変語句	(その細目)
情景描写	中君、九条へ方違えの日付		
54・4	52・10	50・6	大系本 (頁・世)
142・3	138・7	133・10	金沢本 (頁・世)
43・9	39・1	29・12	新典本 (頁・世)
のきちかきすいかいのもとにしけれるおきの	夜なり、	中君こそ、さしならへたらむに、いますこしあはひよからめと、	原作
こなたもたけおほくしけりて、よこたはれひろこりたるまつの木のかげにて、人みつくへくもあらず、のきちかきすいかいのもとにしけれるおきの	御ものいみは十七日なりければ、これは十八日の夜なり、		
11・12	10・11	9・7	笠間本 (頁・世)
いたけにつゞきてのきちかくひろごりたる松のかげより、すいがいのもとにしげりたるおぎにつたひいりて、かいばみ給へば、	御物いみは十七日八日なれば、十六日にわたしまいらせたるに、	おとひめ君を又いかにしてこれにおとらずしつけきこえんとおぼしけるに。	改作
改作本に「よこたはれ」(下二段)の用例なし。	原作の前田本(全釈)は十六日。「十六日」の方が自然か。	「し慣れる」や「りつける」の用例は王朝文学にあるが、いわゆる「しつけをする」「礼儀作法などを教える」等の用例あるか。	備考

13 省略		12 簡略
思惟 中納言の心中		情景描写
55・3		54・6
143・1		142・11
47・5		47・1
これこそ、そのきはのす くれたるならぬ、いかで めもあやにあらんとまも	れ、 りかほめつる三の君なめ ぬ、これこそは、ゆきよ あさましくみをとろき給 みつけたる心地するに、	もとにつたひよりて見た まへは、 にしにかたふくま、にく もりなき月をなかめたる、 このゐたる人、を、をか しとみるにくらふれば、 むら雲のなかりもちつ きのさやかなるひかりを
		11・17
ナシ 改作本の12・2「三の 君なめりとおぼす」と「な げしのしもなるは」の間	す。 つる三の君なめりとおぼ 見給ふ。ゆきよりがいひ かなり。しのびがたくて うつくしともいへばおろ の世の人ともおぼえず、	くまなき月をながめてよ りふしたるは、すべてこ の世の人ともおぼえず、
改作本では、総 体的に心理描写、 心中思惟の文を 省く傾向がある。	傾向がある。 本は、一体に平 易な文をつづる 文調あり。改作 本は、一体に平 易な文をつづる 傾向がある。	原作に「むら雲 のなかり望月 のさやかなる光 をみつけたる心 地」といった美 文調あり。改作 本は、一体に平 易な文をつづる 傾向がある。

項目		14	15
(その細目)		簡略 中納言、中君と契る。対の君の驚き。	簡略
大系本 <small>(頁・行)</small>		55・16	58・1
金歌本 <small>(頁・行)</small>		145・1	147・10
新典本 <small>(頁・行)</small>		49・9	57・4
原作	るに、……このたけのなにかくれてといひて、	人けにおとろきてみかへりたる程に、やかてまきれて……むねはさはきながら、つゆもまどろます、 <small>(新典本で21行の多きを数える)</small>	あまのとあくるけしきなるに、ひるさへかくてあるへきならねは、のちせの山をたのめをきて、きりふかくたちこめたるありあけの月にまきれて、 たちいて給ふ、
笠間本 <small>(頁・行)</small>		12・8	13・6
改作	に挿入されるべきもの。	その程の事、つねのことならんや。その人とも……むねはこがれて、つゆまどろまず思こがる。 <small>(笠間本でわずか7行)</small>	ひるさへかくてあるべきにもあらねば、ふかくたのめをきて、きりふかくたちこめたるに、まぎれいで給ふ。
備考			改作本では、(12)の場合をも含めて原作の雅文調を平俗な文に改める傾向がある。「あまのとあける」「のちせの山」「ありあけの月」等から受けるイメージを享受し得なくな

18 簡略		17 改変	16 改変	
中納言の心中 描写	歌 (対の君)	歌 (中納言)	語 法	
59・14	59・7	59・3	58・13	
151・4	149・9	149・6	149・2	
63・3	61・6	61・2	59・7	
ひとくたりのふみやらん 事も、みつからたによの つねに心かはして……い ひあつかはん、いみしく かたはなるへし、 (新典本で9行)	白露のか、る契を見る人 もきえてわひしきあかつ きのそら	よにしらぬ露けさなりや わかるれとまたいとか、 るあかつきそなき	みたり心ち	
14・8		14・2	13・14	
文などかよはさば、との 、中をこんにこそありけ れといはれんもくちをし く……人にいひあつかわ れん、いみじきかたはな り、 (並簡本で3行)	か、りける露のちぎりの あだなればときのまもな くきえぬべきかな	かよひちのさ、まだわけ ぬあけほのおほえずか 、る袖の露かな	みだれ心ち	
向がある。	多岐にわたる。	物語初頭の歌、あ まの原くものか よひちとちてけ り……」 (新典本25・10)	つた時代・読者 層の影響あるか。	

21	20	19	項目
簡略 女房達の装束の描写	省略 表現の不備	改変 歌(中納言) 歌(中納言)	(その細目)
61・1	61・16	61・7	大系本
153・13	153・12	153・5	全訳本
69・9	69・8	67・10	新典本
をりつくして…心にかけて	中京の御かたに、うへわたらせ給へる程なれば、	忍ふれとおもかけやまのおもかけはわが身をさらぬ心地のみして 思ひありとえもいはかきのぬま水につ、みかねてももらしつるかな もるからにあさ、そみゆる中く、にいはてをやみねいはかきのみつ	原 作
15・12	15・12	15・3	笠間本
ねうばうたち、ことひきつくろひてるなみたるを、日ごろはめだち給ねど……ならぶべくもなければ、おもひいでられて、	中ぐうの御かたにわたらせ給へば、ねうばうたち、	あふことのたゞうた、ねの夢ならば思ひなくさむかたもあらまし 人しれずいわがきこふる山水のつ、みあまりてもらしつるかな つゆばかりいわまもりくる山水にながれてすまむかげは見えじと	改 作
改作本では、装束、化粧の具体的な描写を切り捨てている。(11)、(15)、(16)の場合にも似て、改作本	改作本では「うへ」の語を省略したので文意が通らない。	(17)の場合を参照	備 考

24 簡略	23 省略	22 改変官位
但馬守、三女の 出仕を承諾	中納言、宮の中將に但馬守の三女のことを聞き出す。	
68・14	63・5	62・12
164・11	157・1	155・3
93・1	73・11	71・12
中納言は、人しれず、あふよもあらはとおほすこ	くれゆくそらのみなかめられつ、す、ろに心はさはかれ、あくかる、心地すれと……けふや物いみはてぬらんとおほしやりて、ゆきよりしてとはせ給へば、 <small>(新典本87・11 ざつとよめて84行分)</small>	て思ひくらへ給ふ、 さやうの下らうのよろし きか、
17・1		15・17
中なごんは、人しれず中ぐうにめしいだしたらば	ナシ 改作本の「…むねふたがりて」(16・5)までは原作の73ページの末行あたり(新典本)、そのつぎ「ゆきよりをめて…」(16・5)は原作87ページあたりから取っている。	さやうの中らうは、あまたさぶらひ給ふこそ、
中納言と中宮との会話部分や、歌語の散見する	中君を但馬守の三女と思ひ込んだ男君の憂悶、宮の中將との対話、源氏物語の雨夜の品定めの女性論の部分 を大きく省略してしまつた。卷二にまで影響を与える大部な省略である。	は平易な文章になつている。 (2)の場合にも似て位の一ランク上下するケースが多い。

構 成	項目	項目
記述の順序		(その細目)
72・1	71・6	大系本 (頁・行)
172・1	171・1	金沢本 (頁・行)
103・8	101・4	新典本 (頁・行)
<p>C 御いそぎの事、大殿よりおとろかし申給へれは、おほしたちて……</p>	<p>A 太政大臣には、中君の御心ちをなげきあつかひ給ふをことにて……</p> <p>B このみつきはかりは、れいのやうなることもなく……</p>	<p>原作 とのあれはにや、いたくくちおしうもおほさす…… 我た、ならぬけしきにやみゆらんとおほせは、ことくいにひなしつ (新典本101・3 さつと占めて50行分)</p>
18・4	17・13	笠間本 (頁・行)
<p>B' おとひめ君は、この三月ばかりははれらかなる事なきに……</p>	<p>A' げんじのおとゝの御妹には、御いのりのしるしありて、 中なごんどの、事、大とのよりもをどろかし給へば……</p>	<p>改作 と、おもひなくさめ給て、いなき申べきかたならねば、まいらすべきよし申す。 (笠間本で11行)</p>
<p>原作A↓B↓Cの順序が、改作本ではA↓C↓B'と入れかわっている。改作本では、中の君のことについて述べているなかに、中納言と大君との婚儀の一件が割り込んでゐる。</p>		<p>備考 あたり省略めだつ。また總体的にこの部分は梗概化がめだつ。</p>

28 簡略	27 簡略	26 簡略
中君の描写	中君の描写	中納言と大君との婚儀
75・3	74・10	72・3
175・3	174・14	172・2
113・10	111・10	103・10
かほに袖を、しあて、そむき給ぬるかたの、かきりなくおかしけなるに…	いみしとおほして、おもてのさとあかみたまふまゝに、なみたこほれか、りぬるうつくしさのなるものなきに、いと、かなしくなりて…	女房三十人、わらは四人、しもつかへおなしかす、きしきしつらひ、さばかりはつかしけなる人の…
20・2	19・13	
か程に御袖あて、そむき給ぬる御さまのかぎりなくうつくしくて、ゆら／＼	御なみだのほろ／＼とこぼるれば、さればよと、いとほしたなかなしく…	ナシ
①の場合にも似て、原作における具体的な描写、	ちよつとした表情の描写すら、改作本はけずつてしまう傾向にある。	原作では、婚儀の様子を細かく描写しているが、改作本は、かかる儀式次第の描写に興味を示さぬ傾向がある。②の場合など参照されたい。

30 省 略	29 改 変	項目
三女出仕に期 待する中納言	但馬守三女の 出仕の日付け	(その細目)
77・ 14	77・ 13	大系本 (頁・行)
179・ 13	179・ 13	全訳本 (頁・行)
123・ 3	123・ 2	新典本 (頁・行)
そのよなとき、給ふよは、 御とのゐにて、せうとも いとしたしく侍ものなり… 中納言むねつふれて、め をたて、み給へは (新典本で8行分)	むことりせましきしきに したて、しも月のついで たちころにまいらす、	原 作 きよらにおほくこりあひ て、たくひなくめてたし、 (新典本で6行分)
	21・ 11	笠間本 (頁・行)
ナシ	むこどりをばおもひとま りて、しも月のつごもり ころにまいらせたるを、	改 作 とか、りたる御ぐしの… たぐひなく見給て (笠間本で3行分)
⑬、⑭の場合と同様に、原作にみられる中納言の心中を大きく省略する傾向がある。	原作と改作本との間で、ざっと一カ月のズレを起こしているが、物語の発展の上で、特にその意義、効用は認められない。	備 考 表現を省略。改作本の表記は織細さを欠く。

31 改 変 官 位	32 簡 略 思 惟 中 納 言 の 心 中	33 改 変 中 君 を 思 う 新 少 将
78 ・ 11	78 ・ 16	81 ・ 2
180 ・ 10	180 ・ 13	183 ・ 16
125 ・ 9	127 ・ 3	133 ・ 7
あねふたりあり、一人は 右中辨の女、いまひとり は藏人の少納言のめにて こそあれ、	いとをしく思へと、思ひ つるほとは、たくひなき 心のうちなからも……こ よなくも思ひかへされず、 (新與本で8行)	御まへゆるされぬれば、 新少将とそめさるゝ、い とけたかうにきは、しき 御さま、かきりなけれと、
22 ・ 2	22 ・ 7	23 ・ 6
あねふたりあるは、さ中 べんのめ、ひとりはくら んどのせうをこんのめに とこそあれ、	いかにもこれはなれぬ人 にこそあらめ、これだに ちかづきかたしひなば、 おのづからそのゆくまも しりなんとおぼして、	御まへゆりて、しんせう しやうにぞなりにける。 これをこのしんせう将、 有がたくうれしくおもふ に、中なこんどのありが たくけだかくにぎは、し きすがたなれども、
(3)、(22)の場合と 同じく、その改 変の効用を疑う ケースが多い。	(13)、(18)、(30)と頻 出するように、 改作本では心中 思惟を省略、簡 略化するケース が多い。	文意上、改作本 の「中なこん」 は「中宮」でな ければならない。 改作本のミス。

項目	(その細目)	大系本 (頁・行)	全訳本 (頁・行)	新典本 (頁・行)	原 作	笠間本 (頁・行)	改 作	備 考
34 改 変	歌(宮の中將)	81・13	185・5	135・8	いし山のみねにかくれし 月かけを雲のよそにてめ くりあひぬる 雲るにはすむ空そなき月 なればたに、かくれしか けそ恋しき	23・15	山の葉のはのかに見えし 月かけの雲のうへにぞめ くりあひぬる 夜とともにうはの空なる 月かけはくものうへにて 見るかいぞなき	「在明の別」巻 一に「雲居にて うはの空なる月 かけをいづれの 袖と分きてたづ ねん」の歌あり。
35 簡 略	歌(新少將) 新少將の心中 思惟	82・7	186・7	137・9	しらさりしくもの上にも ゆきましり思ひの外にす めはすみけり	24・5	いかでかく月に心のよは からんさこそくもるにす む身なりとも	(13)、(18)、(30)、(32) と似たケース。
		83・9	188・9	141・7	さるへきひとく、の、わ れにはうちまさりたるも、 このとの、ひとこと葉も のたまひかくるをは…… 身にしみければ、いたく うちなげきて、 (新典本で16行)	24・16	まめやかにあかずおぼし て……有がたきに、つ、 みかねて、 (笠間本で4行)	

38 改変	37 省略	36 改変
対句表現	宮中将の行動	歌 (中納言)
85・2	84・13	84・6
191・1	189・12	189・6
147・1	145・9	145・3 143・11
たれとしらざりつるほどは、 ほうらいの山といふとも……	宮中将よへほのかなりし けはひの、心にと、まり ければ……よしの、山の ちかけれはと、けしきは みてすぐるを、たちとま りて、中納言、	こきかへりおなしみなど による船のなきさはそれ としらすやありつる なみたのみたかせのはま による船のなきさも見え すこかれわたれは
25・12	25・9	25・6 25・2
中なごんは、しらざりし 程は、とらふすのべ・よ もぎがしま・ちいろのそ	みやの中じやう、よべほ のかなりしけわひの心も とまりて……中なごん どのは、	ふねよするおなじみなど のうちなればわたのはら からとをからめやは しら露のしらぬ程だにぬ れし袖をか、る折にはほ すひまぞなき
改作本は、 「虎臥す野辺」 「遠が島」「千尋 の底」と強調表	「故里は吉野の 山しちかければ ひと日もみ雪ふ らぬ日はなし」 (古今・冬・読 人しらず)を踏 まえた原作の部 分のみ、改作本 は省略している。	

41	40	39		項目
改変語句	省略 大君方の様子 と中君方とを 比較する。	省略 中納言の心中 思惟		(その細目)
86・6	85・14	85・5		大系本 (同世)
192・5	191・9	191・3		全訳本 (同世)
151・2	149・5	147・6		新典本 (同世)
下のうちとても	人の心のうちをさへおし はかるに、いふかたなく そあるや……人めいかに あやしと思ふらんと思へ は、しつ心なく、	あけくれたちなれつるお なしふもとのくさなから、 つゆもかくへきかたなく… など思ひつゝくるに、	わたつうみのそこにも… ともに並立して、後文と接し 統いている。	原作
25・17				笠間本 (同世)
きちやうのうちも	ナシ	ナシ	こなりとも、	改作
原作の「帳台」 に対して改作本	(13)・(18)・(30)・(32)・ (39)と同じ。	(18)・(30)・(32)の場 合に準ずる。	現を用いている。	備考

44		43		42	
改 変 語		改 変		改 変	
句		補入・詳細化		歌(中納言)	
87・3		86・12		86・11	
193・9		193・5		193・4	
153・6		151・9		151・8	
あらはかすへくもあらず、		なになり袖のこほりとけ すはと、かうしにちかく よりゐて……あはれなど、 きっしりかほならむやは、		はかなくて君にわかれし 後よりはねさめぬよなく ものそかなしき	
26・15		26・6		26・5	
あらがはすべくもあらず	（笠間本で6行） にはわくかたもなし	わかうへも、かくつねは むすほ、れて心はれたる ときなくおはするは、い かなるかたをおもふらん と……なぐさめきこえ給 へども、御こ、ろのうち		うつ、ともおもひぞわか ぬうた、ねのところにまぎ れし夢のねざめは	
「諸本一致して		原作を、より平 明に叙述する意 図があったか。 改作本の方が長 文になっている。		「うつ、ともお もはざらんね ぬる夜の夢に見 えつるうきこと ぞそは」 （和泉式部日記）	は「几帳」に切 り換える。

項目		45 改 変 語	46 簡 略
(その細目)		句	元旦の大君方 中君方の様子
大系本 (頁・行)		87・9	88・12
全訳本 (頁・行)		193・13	197・1
新典本 (頁・行)		155・1	157・12
原 作		あらからぬものからうけ ひくことなし、	殿のはいらいにまいり給 ければ、いそきいて給ぬ、 御せくまいるけしきなど めてたし……いとくるし くおほさる、みなたちわ かれ給ぬるに、 (新典本で大凡35行分)
笠間本 (頁・行)		27・1	27・12
改 作		あらがはぬ物からさらに うけひかず、	ついたちの日、中なごん どの、御かたにまいりあ つまりたるを……みあさ まる、こ、ちして、をの 〈たち給ぬれど、 (笠間本で8行)
備 考		上野本(原作系) 「あらかはぬ」 (大系本87ページ)	特に目立つのは、 原作における女 房たちの衣裳に 関する詳細な描 写を、改作本は 一切省いている。 (21)、(20)参照。

50	49	48	47
簡略	改変	改変	改変
思惟 中納言の心中	語 法	語 句	歌 (中納言)
97・2	97・1	96・12	93・4
208・7	208・6	208・2	204・4
185・12	185・10	185・4	173・7
宮の御ときにみしかは、 あはれ、けにいかに、ほとなく見えし人の……春	あるにもあらずしつみす くさせ給ふさま、	そのおもむきのさまく にみたれさせ給はむ、	立よれはいはうつなみの をのれのみくたけてもの そかなしかりける 人しれぬ袖のみいと、そ ほつるはよをへるなみの なこりなりけり
32・10	31・11	31・8	29・14
ひしか、 くくるしげにこそ見え給 ぐうなどだにいとちた とくわびしからん、中 あわれげにさばかりいた わしげに見えし人の、ほ	あるにもあらずしのびす ごさせ給ふめる御さま、	れさせ給はん、 その御心のさまぐみだ	たちよれどあらいそなみ のをのれのみくだけてか へり物をこそおもへ あだなみのよるべもしら ずなにとてかあまのすさ みに袖ぬらすらん
(39)、(40)に準ずる。	「すぐす」「す こす」の差異。	改変に意図的な ものあるか。	

53	52	51	項目
改変	改変	改変	(その細目)
中納言の昇進	語句	敬語の用法	
99・16	99・1	98・6	<small>(大系本)</small>
213・1	211・10	211・2	<small>(全訳本)</small>
195・7	193・3	189・11	<small>(新典本)</small>
御にほひのめてたさを、 はなやかになりまさる、 さきいつるはなのやうに ことなくなりたまふさま、 りたまひぬ、いと、やむ かさめしに、大納言にな りたまひぬ、いと、やむ	新少将をあなかに申す らめしありさまなど、な きみわらひみ、そのゆめ の中にも、かゝることな ん侍けると、	なげきをだにこゑたて、 はえすましきに、思ひわ ひぬ、	原 作
33・9	32・16	32・10	<small>(笠間本)</small>
君は月のかさなるま、に に大なごんに成ぬ。ひめ 中なごんは、つかさめし 君は月のかさなるま、に	しんせう将をめさせたり しに、そのたよりにてき 、ひらきたる事、夢のう ちにもかゝる事なん侍る と、	なげきをだにこゑたて、 おもふばかりはえし給は す、	改 作
改作本に敬語を 欠く。(51)と反対 の例。なお中納 言昇進の映えあ る描写を改作本 は省略する。	照。 「き、ひらく」 の用例は、平安 王朝期の作品に 珍しい。永久百 首、増鏡等を参 照。	「このあたり中 納言に敬語を省 く」(大系本の頭注、 98ページ)。 改作本ではこの あたり正確に敬 語を用いる。	備 考

55 簡略		54 省略
中將。 中君を励ます		中君のもとに 忍び込む大納 言
111・2		100・11
227・17		214・1
233・3		197・9
よるひるなげかしく、い みしきを、御前にかへり おはしてみれば……この	<p style="text-align: center;">(新脚本で奥に因行 分の多きにわたる)</p>	こなたには、月のかさな るま、に……
34・14		
さいしやう中將は、大な ごんどの、御けしき人し れずめだち給ふに、いか		ナシ
事態に驚いた幸 相中將が妹中の 君を励ます一件 中の君美貌のこ	大君が髪洗いの 日、大納言が中 君のもとに忍び 込んだ事件。改 めて中君を見舞 ったものの、大納 言の傷心、宰相 中將の不審に思 う……等、一切の 叙述を省いてし まった。物語展 開の骨組みの上 でもやはりその 省略は淋しい。	

	項目 (その細目)						
		大系本 <small>改訂</small>					
		金沢本 <small>改訂</small>					
		新典本 <small>改訂</small>					
	原作		事いみしくなげかしく、 わひしくのみおほゆ、 (新典本で84行分にわたる)				
	改作	笠間本 <small>改訂</small>		におほすらんわれにてい みじかるべきわざをと、 あはれに思ひきこえ給ふ。			
	備考			と、大君の險惡 な状態、父大臣 の悲しみなど、 そのこまやかな 描写を一切省く。 54と同じく原作 巻一の巻末近く 二カ所にわたる 大部の省略は見 逃さない。			

後記——本稿は、甲南女子大学大学院修士課程において、昭和

五十二年四月から、大槻セミの演習に加わった大橋真貴・津

江令子・中川美奈子・原田明美・山内澄子の研究成果を踏ま

えて作製した。全員の演習ノートを対比・調整の上、山内澄

子が対照一覧表の素稿を作製、大槻を含めて修正、検討の末

まとめたものである。今後、一層のこと各箇の意見を持ち寄

り、綿密に考究を重ねて、全巻にわたる対照一覧表を完成さ

せたいと思う。大方の御教導をお願いしたい。